『ルルドへの想い』

私にはいくつかの夢がある。もちろん「ホスピスをやる」というのは自分の働きの中では最大の夢であり、それはいつしか「自らが新しいホスピスを作り上げる」といった大それたものとなってしまったわけであるが…。

函館には多くの教会があるが、フランスの教会には必ず、「聖地ルルド」に現れた聖母マリアの像が置かれている。観光の名所である「トラピスチヌ女子修道院」、「元町カトリック教会」などはもちろんである。「聖地ルルド」への旅。私のもう一つの夢である。

ここで、「ルルドの泉」の話を少ししよう。物語は今から約１５０年前に、南部フランスのピレネー山脈のふもと、ルルドのとある洞窟で始まる。当時１４歳だった少女ベルナデットはここで１０数回も聖母マリアの幻影（他の人には見えない）と出会うこととなる。

ある日、聖母マリアの指示により手で土を掘り起こしたところ、そこから水が少しずつ湧き出て、やがて泉となった。この不思議な少女の話はまたたくまに村中に広がり、この場を訪れる度に既に多くの見物人が集まっていたが、やがて次々と奇跡が起きるようになる。片方の眼を失明していたある男が泉の水でその眼を洗ったところ、見えるようになったという出来事に始まり、死が目前に迫っていた難病の子供を泉に長時間つけたところ、数日後に回復したり、長年の難病が治癒した人など次々に奇跡的な事例が現れたのである。そして、これらの話はフランスのみならずヨーロッパ全土に知れ渡るようになり、さまざまな流れを経て、最終的にルルドの洞窟は聖地として認められ、後にこの地に巨大な聖堂が建立された。

生来病弱だったベルナデットはその後も健康には恵まれず、３５歳という若さでこの世を去ったのだが、死後３日間聖堂に安置された彼女の遺体は全く硬直せず、手足も柔らかく、皮膚の色はまだ生きているかのようにバラ色を呈していたそうである。さらに、死後３０年目になり、彼女を聖列に加えようという動きから、遺体が掘り出されたが、今まさに永遠の眠りについたかのように全く埋葬当時のままの彼女が横たわっていることに、立ち会った関係者一同が驚きの声をあげたという。そして現在では彼女が修道女として最後の日々を過ごした教会内に遺体は安置されているのである。

ルルドの泉での奇跡（病気の治癒例）はその後も次々に起こり、今では多くの巡礼者たちがひっきりなしにその地を訪れている。彼女の死後２５年たって、カレル博士という後年ノーベル生理・医学賞を受賞した一人の若き医師がこの聖地を訪れ、その奇跡を目撃した。腹水でお腹が膨れ上がり、息も絶え絶えのある 19 歳の女性が、お腹に水をかけてあげただけで、数分後に死の淵から蘇ったのである。カレル博士

にとっては信じがたい光景であり、彼は後に科学では説明できない現象であると語っている。

私は子供の時に「ルルドの泉」の話をある本で知ることとなり、興味を強く抱くようになった。何より水をかけたり、飲んだりすることで難病や不治の病が治癒するという「奇跡の水」というものに何か神秘的なものを感じたし、ある意味、夢のある話だと思った。その想いは医師になった今でも全く変わっていない。

医療の現場、特にホスピスの現場では、しばしば民間療法に望みを託す患者やご家族も多い。高額過ぎて、明らかに悪徳商法といったものも多いように思うが、それでも皆、そこに大きな希望を持っている。それを頭から否定することは誰にもできない。

「ルルドの泉」は民間療法とは違うし、そんな商法とは無縁であるのだが、先が見えずに苦しんでいる方たちにかすかな希望をもたらす点では同じかもしれない。

医療の現場では常識では考えられないようなことが起こることがある。それは不思議な力というか、その人の内から発する力なのか。病状の進行がある時期止まり、穏やかな時間が思いがけず続く場合が多々ある。私たちは、医学というものを科学的に学び、結果について常に根拠を求めてきた。しかし、一方で多くの医療者がきっと科学だけでは説明できない、人の生と死にまつわる神秘的な体験をしていることと思う。それを認めることは医師としては失格なのかもしれないが、私はいつまでもそういった経験をそのまま素直に受け入れることのできる感性を持っていたいと思う。

ルルドへの旅は、そんな想いを体感してきたいという私の夢の一つなのである。

（平成 15 年 12 月 16 日　著）